

佛教(眞宗)篤信者の宗教意識と

宗教行動とに關する一研究

久 木 幸 男

篇末に掲げたデータは、佛教的眞理がどの様に實現されているかという觀點から、眞宗篤信者の宗教意識と宗教行動とに就て質問書法によつて調査した結果を集計したものである。調査對象は滋賀縣彦根市周邊の農村における篤信者八四名であるが、比較的高齡者が多い(最高七七歳、最低二五歳、平均五七・九歳、六一歳以上の者が四一%を占めている)。性別は男四〇名、女四名、職業は七割五分までが農業、主として中・上層の農民である。地域的に限られた調査であり、事例の数も多くないので性急な結論を引出すことは危険であるが、今はたい特徴的な點を指摘するにとどめたい。

調査對象の九四%は自らを信仰の所有者と信じている。信仰を持たないとする者及び信仰の有無を答えなかつた者はそれぞれ三・六%及び二・四%にすぎない。入信の動機は無常感が七二・二%で壓倒的に多い(Ⅰa)。之は宗教に關心をもつようになつた動機に於ても死に關するものが多いという事實(Ⅱb、死及び病氣に關するものは個人的要因に於て五割二分、環境的條件に於て二割五分)と相俟つて人間を罪惡的存在として把える筈の他力教に於てすらも、出離生死という佛教本來の立場が貫かれていることを示すものとい

えよう(尙Ⅱbには「道德的反省」が皆無であつた)。入信の時期は戦後が多く戦争中が目立つて少ない(Ⅰb)。戦争という異常の事態は人をして異常ならしめるからであらうか。又戦争中の入信者は社會的關心が低い(Ⅲc)。社會的に反應することの少ない人のみが戦争による異常な緊張状態の中でもないわば條々と廻心しえたともいえよう。入信の年齢は青年期が案外少なく、男性では三十代後半及び五十代、女性では四十代が最も多い。いわゆる「強健有力時自策自勵求常住」ことがなされている譯であり、宗教は青春の感傷ではなくしてまさに一生を賭けるべき問題であることが示されている譯である。家庭の宗教という色彩が一方では濃いにもかかわらず(Ⅴc、Ⅱb)、他方家庭に於ける宗教々育の影響は餘り大きくはない(Ⅱa)。又幸福・平和・成功などが宗教に關心をもつ機縁になつた者は全然なく、人生に於ける否定的なもののみがⅡbに數えられているのは、佛教の性格をはつきり物語るものといえる。なお環境的要因のうち、社會の矛盾・戦争など社會に關するもの一割六分に對して、家庭に關するものの合計は二割七分にのぼっている。

宗教の社會的役割に關しては、宗教が現實に果している役割に否

佛教（眞宗）篤信者の宗教意識と宗教行動とに關する一研究（久木）

定的懷疑的なものが稍々多い（Ⅲ a）。これは調査對象の年齢には殆ど無關係であるが（六五歳以上の高齢者及び四五歳以下のグループに於ては否定的懷疑的なものが幾分多い）、入信の時期にはかなり關係がある。大體に於て、戦前の入信者は肯定的、戦後の人は否定的或は懷疑的、戦争中に信心を得た人は無關心であるといえよう（Ⅲ c）。しかし之に就ては將來に期待を寄せる者は多い（Ⅲ b）。

この事は、現状には否定的懷疑的なものの中にも將來には期待を懷いている者が少なくないことによつても明らかであるし（Ⅲ d）、又「社會問題解決の爲宗教の立場から努力するべきである」とする者が壓倒的に多い（八二%、努力の要なしとする者一・二%、無回答一六・七%）ことから容易に察せられるであろう。然らば、彼らが將來の宗教によつて社會問題が解決されうと期待しているその解決の方向は如何なるものであらうか。之を明らかにする手掛りとして戦争に對する態度を問うたのであるが、戦争に反對する者六〇%、無回答一八%に對し、戦争に賛成する者が二一%もあつた。このことは彼らの有する社會性の方向を指示しているようである。

社會的な働きかけの必要を痛感する者が多いにも拘わらず、現實の彼らの宗教的實踐としては例えば傳道の對象を家族と答えた者が壓倒的に多いという事實（Ⅴ c）、又教團に對する批判にも精神主義的なものが多いということ（Ⅳ a）など、何れも彼らのもつ「社會性」の内容と限界とを示しているといえよう。藤島教授は「妙好人の社會性」を肯定しているが（日本佛教學年報一九號）、そして我々も妙好人のみならず一般に篤信者の社會性を否認しようとするものではないがその社會性の内容・方向に就てはいささかの疑問なきを得ない。教團に對する態度としては、七〇・二%が批判的である

に對して、教團の現状を肯定する者は一一・九%にすぎない。しかし批判の内容には前述の如く若干問題があらう。教團に批判的な人々も法主に對して肯定的なのは（Ⅳ b）この問題がタブーになっているためであらうか。教義と教團制度との結びつきの弱いことは佛教々團の三つの弱點の一つであらうが、この弱點は法主を生き佛と崇める人が三分の一以上もいるという事實にも現れているようである。

讀んだことのある聖教の中では正信偈と御文とが最も多い（Ⅴ a）。大經や教行信證を讀んだ者が一割餘宛しかないことと考えると、聖典が内容よりも形式——教義的にどれだけ重要であるかということよりも、餘り浩瀚でなく讀み易いということ——によつて選擇されていることが判る。なお七祖の撰述を讀んだことのある者が一人もなかつたことも一應注目してよからう。念佛は正統的な佛恩報謝の念佛が多く（Ⅴ b）寺參りの回数は年齢（高齢者の方が稍々多い）性別（男性が幾分多い）には大きい關係なく、平均日に三回餘である（Ⅴ d）。勤行を毎日行つてゐる者は六割弱で豫想外に少ない（Ⅴ e）。眞宗の教を他人に傳えたことのある者のうち九八%までが家族に傳えた經驗をもつてゐる（Ⅴ c）。他宗教に對する態度は最も解答のえられなかつた問題であつた。彼らの多くは他宗教には無關心であり、答えたものの内四割は眞宗以外の宗教に不寛容の態度をとつてゐる（Ⅳ a）。他宗教に關する經驗としては、他の宗教を信じ又は關心を持つたことのある者が都合僅か一割二分（Ⅴ b）、過去一年間に他宗教の教會へ行つたことのある者は殆どないが（Ⅴ c）、一方神社へ參拜したことのない者は一割餘にすぎない（Ⅴ d）。この事實は農村人の精神生活に於ける神社の地位を示すものであるが又從來の眞宗の神社に對する態度の反映でもある。

時期	評價		
	肯定的	懐疑的否定的	不明無回答
戦後	33.3	47.6	19.1
戦争中	14.3	28.6	57.1
戦前	43.5	39.1	17.4

(d) 現状に對する評價と將來への期待

現状	將來			
	肯定的	懐疑的	否定的	不明無回答
肯定的	85.2	7.4	0	7.4
懐疑的	47.6	52.4	0	0
否定的	33.3	44.5	11.1	11.1
不明無回答	48.2	11.1	0	40.7

(Ⅳ) 教團に對する態度

(a) 教團批判の内容*

信者の自覺不足	71.2
僧侶の自覺不足	57.6
本山が親鸞の精神から離反している事	23.8
教えの脱き方の古さ	18.6
本山が社會の進展から離反している事	15.2
制度の封建性	13.6
無回答	6.8

(b) 法主(門主)に對する態度*

尊敬し	41.7
親鸞の子孫だから	35.7
生きた佛だから	19.0
人格者だから	1.2
入信を主張する人	9.5
入信を主張しない人	22.6
無回答	

(b) 他宗教に關する経験

他宗教を信じていたことがある	6.0
關心をもつていたことがある	6.0
信じたことも關心をもつたこともない	52.3
無回答	35.7

(c) 他宗教の教會への参拜

(過去一年間の経験)

参拜した	2.4
しなかつた	79.8
無回答	17.8

(d) 神社参拜の回数

月に3回以上	1.2
" 2回	4.8
" 1回	11.8
2—3月に1回	10.8
4—6月に1回	32.2
1年に1回	10.7
全然参拜しなかつた	13.1
無回答	15.4
平均	月に0.46回

特に單位を附けてない數字はすべて%をあらわす。
※を附した項目は、擇一的な解答を求めなかつたため、數字の合計が100%をこえている。

(b) 個人的・環境的要因*

死に就ての思索	39.3
人生への反省	22.6
病氣	13.1
生活の失敗	1.2
家族との死別	23.8
社會の矛盾	9.5
戦争	7.2
家庭の不和	2.4
家族の病氣	1.2
その他	4.8
無回答	16.7

(Ⅲ) 宗教の社會的役割

(a) 現状に對する評價

宗教は社會問題解決に役立っている	32.1
役立つことも役立たないこともある	25.0
役立たない	10.7
わからない	8.4
無回答	23.8

(b) 將來への期待

信者がふえれば解決しうる	57.1
解決しうることもしえないこともある	25.0
解決しえない	1.2
わからない	3.6
無回答	13.1

(c) 入信の時期と現状に對する評價

(d) 寺参の回数

月に4回以上	26.2
" 3回	25.0
" 2回	26.2
" 1回	7.2
" 1回以下	9.4
無回答	6.0
最も平均	月に25回 " 3.2回

(e) 勤行の回数

毎日	59.4
月に10回以上	16.6
" 5回以上	7.2
" 3回以上	2.4
" 1, 2回	4.8
全然していない	4.8
無回答	4.8

(Ⅵ) 他宗教に對する態度
その他

(a) 他宗教に對する態度

他の宗教は皆誤りである	23.8
他の宗教の中には正しいものもある	11.9
他の宗教も或る程度正しい	15.4
すべての宗教は皆正しい	6.0
無回答	42.9

[I] 入信の動機・時期・年齢

(a) 入信の動機*

無常感	72.2
罪惡感	32.9
不安	12.7
その他	5.1
無回答	5.1

(b) 入信の時期

戦後(0—8年前)	41.2
戦争中(9—17年前)	13.7
戦前(18—26年前)	23.5
" (27年以上前)	21.6

(c) 入信時の年齢

入信時の年齢	男	女	計
20歳以下	13.3	9.5	11.8
21—30歳	16.8	14.3	15.7
31—40歳	20.0	23.8	21.6
41—50歳	13.3	33.3	21.6
51—60歳	20.0	14.3	17.6
61—70歳	13.3	4.8	9.8
71歳以上	3.3	0	1.9
平均	42.2才	39.9才	41.2才

[Ⅱ] 宗教への關心の動機

(a) 宗教々育の影響*

説教・寺参	51.2
宗教家・篤信者の感化	39.3
家庭の感化	36.9
勤行	23.8
無回答	11.9

[Ⅴ] 宗教行動

(a) 讀んだことのある聖典*

正信偈	81.0
御文章	79.8
三帖和讃	44.0
歎異鈔	39.3
正信處大意	26.2
小經	17.9
御傳鈔	16.7
大經	13.1
觀信證	11.9
教行信證	10.7
口傳鈔	10.7
その他	1.2
無回答	11.9

(b) 念佛をとる目的・理由*

佛恩報謝	71.4
降魔命	14.2
信仰を深める	10.7
心が和かになる	7.2
目的理由なし	4.8
その他	6.0
となえていない	3.1
無回答	7.2

(c) 傳道の對象*

家族	73.8
親戚	31.0
友人	28.6
傳えたことなし	15.4
無回答	9.5